

世界文学紀行——ヘッセとゲーテの作品の舞台を訪ねて

ヘッセが青春時代を送ったカルフ

ヘルマン・ヘッセの「車輪の下」を読んでからちょうど50年あまり。長年の夢がかなって、私は著者の生まれたドイツの田舎町カルフを訪ねました。山岳鉄道のような一両列車から駅に降りたのは私を含め3人のみ。歩を進めた先は実に静かな美しい町でした。

周囲を山々に囲まれた谷のあまり広くない空間に、レンガ色からオレンジ色の4・5階建ての木造の家屋が並んでいます。まるでスイスの山中の光景のようです。

日曜日のせいか、レストランのテラスでは地元の男性がビールを傾け談笑していました。途中で気のよさそうな壮年にヘッセ博物館を尋ねたところ、身ぶり手ぶりで元気いっぱい教えてくれました。ところが指示された通りに行っても、それらしき建物は見当たりません。再度、近くを歩いている壮年に確認したところ——

「なあんだ、あなた、まったく反対の方向に来ていますよ。ここからじゃ教えても難しいと思うから、私が一緒に行ってあげますよ。きっと教えてくれた人も、むげに断ると悪いと、思いつくままを言ったんですよ。親切もこれだともう一歩ですよねえ!」。そう言って自ら案内してくれる壮年の、今度は本当にありがたい親切……。

物語を初めて読んだのは高校時代の夏休みでした。ドイツの優秀な若者が厳しい神学校の規律と生活の中で懊悩し、最終的に死に至る、という筋書きでした。たまたま同じドイツのゲーテの作品「若きヴェルテルの悩み」の主人公が、思うようにならない恋愛からピストル自殺をしたのに対して、こちらは未来ある若者が川に落ちて死ぬ、というストーリー。希望に燃えて青春を生きようとする若者たちにとって、共感がある半面、何か割り切れないものも感じたものです。

——秀才ハンス・ギーベンラートは生まれた村の期待を一身に担ってシュツットガルトの神学校で勉学に励むが、ヘルマン・ハイルナーとの友情、エンマとの淡い恋の中で、学業から遠のき、やがて生まれた村に戻ってきて、職工として働くことになる。そして酒を飲みすぎ川に落ちる——

作品はマウルブロン修道院で過ごしたヘッセ自身の青春の苦悩が軸になっています。氏の数ある作品の中で『車輪の下』はとりわけ日本人に読まれています。それは受験地獄と学歴優先社会の現代の日本にも通ずる何かがあるからなのでしょう。

ここでは筆者が特に感銘を受けた文章を「あらすじ」がわかりやすいようにストーリーに沿ってあげてみます。(井上正蔵訳)

p 114 シュワルツワルトのこの小さな町から、こんな少年が生まれたことはいままでに一度もなかった。

p 117 ああ、魚釣り。釣りのことなんかもうすっかり忘れてしまっていた。去年、受験勉

強のために釣りを止められたときは・・・

p 127 エンマはこの町で一番かわいらしく上品な女性で、ハンスとは同学年だった。あのころ、エンマと語り合いたいとか、手を握り合いたいとか、そんなことばかり願っていた時期があった。

p 161 不釣り合いな組み合わせの友達もあった。一番不釣り合いだと思われたのは、ヘルマン・ハイルナーとハンス・ギーベンラートだった。軽薄な少年と良心的な少年、詩人と努力家という両極端のふたりだが、どちらも頭がよく、才能あるトップグループに数えられていた。しかし、ハンスが模範生という評判が高かったのに対し・・・

p 176 「うん、これでよし。へたばらないようにするんだよ。さもないと車輪の下に押しつぶされてしまうよ」

p 187 ハイルナーは放校という不名誉な処分を受け・・・

p 193 ……場所を見つけてそこを死場所と決めた。何度もそこへ行ってはすわりこみ、自分がいつか死体になって発見されることを想像して、不思議なよろこびを覚えた。縄をかける枝も見当をつけて、その強さも確かめた。

p 210 エンマは、垣根ごしに手を差し出した。ハンスはおそるおそるその手をやさしく取って、軽く握った。その手が引っ込められないとわかると、勇気を出して、あたたかい娘の手を用心深くそうっと撫でてみた。・・・今度は頬にあてた。・・・うっとりとするような疲労が・・・

p 211 ハンスは娘の唇が燃えているのを感じた。その唇がひた押しに迫ってきて、ハンスの生命まで飲み干そうとするかのように、むさぼり吸っているのがわかった。・・・ふるえるような快感が気の遠くなるような疲労と苦痛に変わった。

p 215 エンマはもう一度ハンスの手を取って、ふざけながら自分のコルセットの下に押し込んだ。すると、ハンスは、これまで知らなかった肉体の脈拍と呼吸をこんなに熱く近く感じて、心臓が止まり息が詰まって、いまにも死ぬのではないかと思うほどだった。

p 216 ハンスにとっては甘さよりも、苦味のほうが多かった。

p 230 どうしてハンスが水に落ちたか、知っているものはいなかった。

p 230 「あんなにできがよくて、万事うまくいっていたんだがね。学校も試験も、それが急に不運が重なって・・・」

博物館はヘッセの生家から石畳を 50 ほど歩いた先にありました。木造の大きな 4 階建て。展示室の入り口にあった訪問者の署名簿に、私は 50 年来の夢を叶えて訪れた感動をページいっぱい英語で書きこみました。日本からの訪問者も多いようです。受付で借りた携帯の音声ガイドには日本語も入っていました。

町のあちこちにヘッセの像。美しいカルフの町もヘッセなしでは語れない。鉄道駅から比較的広い車道を横切ってすぐに川がありました。著者が若い時に釣りをしたという川です。そこから歩いて約 5 分、実はヘッセ博物館は方向を間違っさえいなければすぐ近く

だったのです。

### ゲーテハウスで文豪の生涯を偲ぶ

高校 2 年の夏休みに学校図書館から借り家で読んだのが、空色の表紙の全集で『若きヴェルテルの悩み』と合冊になった『ファースト』でした。正直、とても難しく取りつきにくかった。大学者ファーストと彼の魂をたぶらかそうとした悪魔メフィストフェレス。それに美少女グレートヒェン……。

ドイツ訪問を前に市の図書館から借りてきて再び目を通して見た。それでも難しいことに変わりはありませんでした。こちらが精神的に成長してないのか、作品自体の深遠さと難しさからなのか。ただ、霊界をも含めた劇で人間の魂の深遠に迫っていることだけは感じられたものです。

『若きヴェルテルの悩み』はゲーテが 25 歳のときに発表した作品。内容は大人の世界の恋愛模様で、まだ初心な自分には深く理解するには難しかったですが、それでも若い男女間の心のやりとりと懊悩は、自分の心にも何かを残していました。あれから 50 年あまり、つまり半世紀後の自分は、それなりの人生経験を積んだかもしれません。こちらは以前より深く読めたような気がします。

一言で表現すれば、典型的な恋愛悲劇ですが、時代が異なるとはいえ、昨今の軽い恋愛小説とは重さが違う。それにしても、礼節をわきまえながらも、新婚の夫人にいつまでも惹かれていくヴェルテルの気持ちも異常です。その行き着いたところが愛してやまないロッセの新夫アルベルトから借りたピストルでの自殺でした。若者が悩みながらも命をかけて愛を求めていった姿が読者の共感を呼ぶのでしょうか。

6 月 8 日、小雨の降りかけた午後、「ゲーテハウス」を訪れました。フランクフルト中心街。5 階建ての大きなハウスの各階には当時をほうふつとさせる家具や道具類が展示されていました。木造の階段を上り展示室に入ると、キシキシと 40 ㎝幅ほどの板を並べた床が音をたてます。床は何万（いや何十万かな？）の訪れた人々の靴に踏まれすり減っています。さすが 200 年の歴史です。

どの家具類も大きく、繊細で芸術的な飾りが彫られています。展示されている当時の本の厚さと大きさには驚きました。私はしばし、ガラス窓で保護された本棚の前にたたずみ、高校時代に読んだ作品に思いをはせてみたのでした。

ゲーテが亡くなる直前に書きあげた『ファースト』は人生哲学の塊です。あらゆる学問を究め、知識の無力さに絶望した主人公・ファーストのもとに出現した悪魔・メフィストフェレスは、物語の冒頭で契約を結ぶ。メフィストフェレスの魔術によってファーストは官能快楽の限りを体験する。しかしこれらのすべてが自身を満足させられないことを知り、

最終的には民衆の幸福のための理想的な国土を建設することを決意、他者への奉仕を始めるのです。

実際、ゲーテは政治家としても生活に苦しむ市民のために各種の改革を断行しています。理想の社会建設に尽くそう——これがゲーテの呼びかけだったのです。そんな偉人の跡を訪れると、自分があまりにもちっちゃく思えてきます。それでもなにがしかの啓発を与えてくれるのが旅の醍醐味なのです。

ゲーテはドイツの各地にその跡を残しています。ビンゲン市にあるSGI（創価学会インターナショナル）ドイツ総合研修センター「ヴィラ・ザクセン」裏山の高台もその一つ。「ここから見たライン川が最も美しい」とゲーテが言ったという高さ300メートルほどの小山。頂上には「ゲーテ展望台」がありましたが、なにせあれから約2世紀。周囲の木々の枝が伸びてライン川も見え隠れするほどになっていました。

それでも、高台から望む父なるラインの光景は素晴らしいものでした。遠くに古城も見えます。そこで今回は「ローレライ」伝説で有名なライン川のクルーズ紀行を紹介しましょう。